

杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN

大学新聞

1~2面	新学長に聞く	5面	オール杏林でHIV感染者ケアに取り組む
3面	杏林見聞録 杏林大学病院医療ソーシャルワーカー 加藤 雅江さん	6面	総合政策学部 大学コンソーシアム発表会 在学生紹介 総合政策学部 齋藤拓巳さん
	卒業生リレー 途上国で医療活動 赤尾 和美さん(看護専門学校卒業)	7面	外国語学部 実践カリキュラムで活躍の舞台へ わたしの書棚から
4面	学部・大学院トピックス 医学部 1年生から将来設計(ほか) キャンパス紹介 総合情報センター	8面	連載 金田一教授の研究室から 健康ひとくちメモ
5面	保健学部 臨床心理学科開設		クラブ紹介 スキー部、華道部

大瀧純一新学長に聞く

社会を見極め、一步を踏み出せ

2018年4月、杏林大学の第8代学長に、これまで保健学部長を務めてきた大瀧純一教授が就任しました。

「真・善・美の探究」を建学の精神に発展を続けてきた杏林大学。ここ8年間は跡見裕学長のもと、「Moving global, Staying local」を合言葉に、優れた人格を備えたグローバル人材の育成や、地域に貢献する大学として飛躍の歩みを続けてきました。創立50周年にあわ

せて井の頭キャンパスも開校し、4つの学部の連携が一層可能になっています。

こうした成果を引き継ぐ大瀧新学長は、特色ある中規模総合大学としてどのような大学づくりをめざすのか。そして学生たちに何を期待し助言するのか。

18歳人口の減少に代表される厳しい環境を迎えるなか、31年間にわたって杏林大学とともに歩み、見つめてきた大瀧新学長に、学生たちが聞きました。



大瀧純一新学長にインタビューをする医学部の権藤史也さんと総合政策学部の池上理紗子さん。インタビューは井の頭キャンパスの学長室で行われました

小樽生まれの北海道育ち 富士山とたわわに実る柿に感動



おおたきじゅんいち
学長 **大瀧 純一**
1951年生まれ。1986年札幌医科大学医学部卒業、杏林大学大学院医学研究科修了。2000年杏林大学保健学部教授。2006年保健学部長

医師への道のり

池上：先生のご出身はどちらですか？

大瀧：北海道小樽市です。今は小樽運河沿いに石造りの倉庫が並ぶ観光地として有名ですが、祖父は大正・昭和にかけて、多くの従業員を雇って本州から送られてくる米を保管する倉庫業を手広く営んでいたんですよ。私は、倉庫業を継ぐのかと思っていました。ところが米の品種改良が進み北海道でも

米がとれるようになり倉庫は必要なくなっていました。

そこで初めてこれからの人生の選択をしたわけです。職業を選ぶというより、会社など組織に縛られず独立してできるかがポイントでした。その当時、独立してできる職業はそれほど多くなく、医学の道を選択し、札幌医科大学に入学しました。

卒業後、研修医としての2年間は地元を離れてみようと思っていたので、三鷹近辺に住んでいた伯父を頼って上京しました。これが杏林生活のスタートでしたね。

北海道から東京に来たときのカルチャーショックは大きかったですよ。感動したのは実物の富士山を見たこと、1月に雪がなく梅が咲くこと、柿の木に実がなるのを見たことなど沢山あり

ました。一年の半分以上が冬の北海道では、梅も桜も5月に一斉に咲くし、実りの秋などあっという間に終わってしまいます。徒然草の「大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、周

研修医から杏林ひと筋

現場で学んだ“責任” つらいことは身になる

権藤：研修医時代の思い出を聞かせてください。

大瀧：杏林大学は当時から救急に力を入れていました。今の松田博青理事長先生がセンター長をされていた頃です。

急性心筋梗塞、交通外傷などいろいろな患者さんが搬送され、一刻を争う救急現場の経験は想像以上に大変でした。当直を頼まれたある病院では、一度に3台の救急車がきて、一晩中寝ないで対応したこともありました。切羽詰まった状況や責任を負う場面を体験できたのが研修医時代でした。

りをきびしく囲むたりしこそ、少しことさめて、…」の一節もイメージできなかったわけです。そしてなんといっても東京は冬が暖かく、過ごしやすのが良かったです。



1992年、精神神経科医局員とともに。左から2番目が本人

2年間の研修後、さらに杏林大学大学院で4年間研究を行い、学位を取得しました。

「そのときはつらいが、自分の身になる。楽しんでいるはそうした経験はできない。いつまでも誰かが教えてくれるわけではない。自分で道を切り拓き、踏み出すことが必要」と学びました。

時代を先取り？ 認知症に着目

権藤：なぜ精神科を選ばれたのでしょうか。
大瀧：人よりも多少遅れて医師になったので、それからでも十分追いつける科を考えました。外科は無理。内科はよほど特殊なことをしないと無理。さらに今と違い、専門が消化器でも循環器でも内科とひとくりにされてしまう時代でしたので、範囲が広すぎました。皮膚科は専門用語が古くて難しかったです（笑）。

いろいろ考えるうちに高齢者分野なら追いつけると思い、統合失調症やうつ病が研究の主流だった当時の精神科で「認知症（当時の痴呆症）」を研究しようと思ったんです。これからの日本は高齢化社会を迎え、おのずと認知症の患者さんが増えると思い、認知症の専門医として社会や患者・家族に役立ちたいと思いました。周りからは、認知症を研究してどうするんだ、年をとれば認知症になるんだ、と言われましたけどね。

人のしないことに可能性と魅力が

権藤：周りと違うことをするのは勇気がいりますが、抵抗はなかったのですか？
大瀧：ないといえようそになる。でも人がしていないことに可能性やチャンス、魅力があると思いました。何かを初めてするとき、不安や失敗、挫折はつきものです。挫折と思わず、よい経験をしたと考えれば、決して無駄ではないと思っています。何ごとも後ろ向きではなく、前向きにとらえていくことが大切だと思いますね。

大学は自ら学ぶところ 先生を存分に活用せよ

大瀧：大学は高校までの学びとは違います。そのことを1年次から理解してもらいたい。
 大学では、基本は授業で教えますが、それ以外は自分に必要なことを自分で学んでいきます。
 医学部、保健学部でいうと、教科書に書かれているような典型的な患者さんにお目にかかることはほとんどありません。心臓疾患のある人が糖尿病を患っていたり、生活するのが大変だったり、人それぞれです。患者を総合的に診るために、合併症の知識や、社会問題など様々なことを結びつける力が求められます。



井の頭図書館4階の自然科学系フロア。学習机は仕切りが設けられ、個室の雰囲気勉強できる

インタビューを終えて



いかにりさこ
池上 理紗子
総合政策学部総合政策学科3年。藤原ゼミ。和歌山県出身

大学と高校での教育の違いについての話が印象に残りました。大学は自ら教育を求めに行く場。目標を実現するために何が必要で、何を学ぶべきかを考えて行動する大切さを教えていただきました。
 ゼミでは先生が親身になって勉強や就職の相談にのってくださいます。「先生を活用」するつもりで、今後もゼミ活動を意欲的にしていきたいです。残り1年間の学生生活は、半分が就職活動になり、残りの半分は自由な時間を使い、楽しむだけでなく身になる経験をしたしたいと思います。杏林大学で過ごす最後の1年、胸を張って社会に出られるよう頑張ります。

“選ばれる”大学であるために 学長として進める3つのこと

池上：新学長としてめざす大学像を聞かせてください。

大瀧：選ばれる大学でなければ、生き残れません。需要のあるところを増やし、伸ばす。これから1、2年で実践したいと思っています。

文部科学省は私立大学も3つの群に分ける構想があるようです。①大学院博士課程を主とする大学、②修士課程を主とする大学、③学部教育を主とする大学になりますが、本学もどこの群に属することになります。

常にその分野のトップクラスをめざす

大学試験の時代と言われていますが、本学も常にその分野のトップクラスにいないと生き残ってはいけません。

トップクラスの大学をめざして教員は努力を惜しまず教育、研究に邁進します。学生も同じ気持ちで進んでいただきたいと思っています。

杏林の卒業生がさらに大きな誇りを持つような大学にしたいと思っています。

学部の特色を活かした教育・研究・地域貢献を実行

次に、医療系、人文・社会科学系の4つの学部のある総合大学として、学部の特色を最大限に活かした教育・研究・地域貢献を実行することです。



井の頭キャンパス本部棟

医学部や保健学部にとって附属病院があることは大きな利点です。杏林大学病院はチームワークによる質の高い医療と患者さんへの行き届いたケア、良き医療従事者の育成を実践しています。優秀な医療従事者のいる病院が実習の場となり、他の大学では真似の出来ない実習方法で、確実に学生のレベル上昇が見られます。

井の頭キャンパスへの移転で整備された教育環境は、総合政策学部と外国語学部にとってこの上ない強みです。杏林大学は2つのキャンパスが近くなることで文系と医療系の学びの連携が一層強くなっています。このことは近隣にたくさんある文系の大学との大きな違いです。

“社会の健康”を守る大学に

これまで医療系の学部では、“人の健康”を守る大学としての役割を果たしてきました。文系と医療系が連携した特色ある総合大学の杏林大学では、これから“社会の健康”を守る大学をめざしていきましょう。地域の高齢化の問題や防災対策、あるいは開発途上国への支援。こうした文系学部の取り組みも“社会の健康”を守ることに繋がると思います。

需要のあるところを伸ばす

時代の求めに応えることが、発展への足がかり。2006年から2018年3月まで保健学部長を務めた大瀧学長。

保健学部長就任時、3学科だった学部を12年間で8学科に成長させ、この4月には9番目の学科、臨床心理学科を開設。幅広く保健学を学ぶ環境を整えた。

多くの大学が新しい学部や学科を開設したり、杏林のように新しくキャンパスを開設したりしています。新しいことは受験生にはとても魅力的に映ります。

ただ、それで終わりではありません。工夫を重ね、さらに新しいことに取り組む続ける。常に進歩発展をめざすのです。そうでなければ厳しい時代を生き抜くことは難しく、最悪の場合、大学は淘汰されてしまいます。

杏林大学のこれからの課題は、学生をさらに上の段階まで教育し、いかに社会で活躍してもらうかにかかっています。そのためにすべきことを一つひとつ実行していきたいと思っています。

女性の時代の到来

全学の55%が女子学生

池上：最近、総合政策学部では女子学生がずいぶん増えてきました。

大瀧：保健学部でも男子学生が圧倒的に多い救急救命学科でさえ女子学生が見られるようになりました。消防庁などの就職先からも高い評価をいただいています。

理解力や適応力、コミュニケーション能力などで、もともと女性は男性より優れている。私は以前からこう考えているんですよ。こうした能力を社会のために活かさない手はない。

杏林大学全体で女子学生が学ぶ環境を整えていきたいと思っています。

一步を踏み出せ

大瀧：「杏林の学生は少しおとなしい。ただ、任せるときちゃんとしっかり実行する」実習先の病院や就職先の会社からよく聞かれる声です。実力は備えているので、一步踏み出す力がほしいですね。こはぜひ強調しておきたいところです。

将来を見極める目を養え

大瀧：学生のうちにすべきことはたくさんあります。勉強の習慣、自分で考え自分の言葉で発信すること、社会を見る目を養うこと。そのために、ひとつの例として新聞を読む習慣をつけてほしいと思います。株価の動きを毎日見ているだけでも、国際情勢の動きや企業の浮き沈みなどがわかってきます。

学生の皆さんは将来を見極める目を養い、何が必要なかを瞬時に吟味・判断する力をつけてください。世の中は3年5年であつという間に変わってしまいます。こうした力をもとに、どのように人生設計をするかがとても重要なのです。

杏林大学でチャンスをつかみ、大きく羽ばたいてほしいと思います。



いちばん印象に残ったのは「挫折と思ったことはない」という言葉です。前向きに考え、失敗したことから学び、常に次に活かす。その思考は今後ぜひ取り入れていけたらいいと思います。また、「今の杏林の学生はやれば出来る学生が多いのに、引込み思案でおとなしい」と仰っていたことにも考えさせられました。今の世の中、インターネットが普及し、情報が溢れ、地球の裏側にいる人とも瞬時にコミュニケーションがとれる時代。なにか少しでもやるかやらないか迷うことがあれば、億劫にならず、ぐっと力をいれて一步踏み出すことが自分の未来に繋がると思いました。



ごんどう ふみや
権藤 史也
医学部医学科1年。東京都出身

杏林見聞録

第10回

仕事のネットワーク活かし、地域ぐるみで子育て

杏林大学医学部附属病院で医療ソーシャルワーカーとして働く加藤雅江課長。仕事で築いたネットワークを活かし、地域住民、行政、教育機関の支援を受け、子どもの居場所「だんだん・ばあ」を立ち上げました。その思いと、活動についてうかがいました。

かとう まさえ

医学部附属病院 加藤 雅江



医療福祉相談室で働くソーシャルワーカーは、加藤さんを含む12人。患者さんが地域や家庭で自立して生活できるよう支援するのが主な仕事。

加藤さんは課長として業務管理を行いながら、院内・院外の様々な要望に応じる。難しい案件への対応や相談で加藤さんを指名する医療スタッフも多く、院内では頼れる存在だ。

その仕事ぶりはNHKの番組などでも紹介された。

杏林大学医学部附属病院患者支援センター 医療福祉相談室課長、虐待防止委員。日本子ども虐待医学会代議員。日本精神保健福祉士協会代議員

だんだん・ばあ

私はいま、「居場所作りプロジェクトだんだん・ばあ」の代表として、地域ぐるみで子どもを見守り、地域の中に居場所を作る活動をしています。「だんだん」は「ありがとう」を表す島根の方言。そういう言葉がいつもある場(ば)になるといいな、と思いつきました。

「だんだん・ばあ」は2017年10月、三鷹市中原町の団地の集会所を拠点に活動を始めました。月に2回開催。平均すると、毎回の活動には子どもが60人前後、ボランティアの大人が20～30人くらい参加しています。「だんだん・ばあ」設立のきっかけは、私の仕事に深く関係しています。病院では子どもを巡る多くの問題に直面します。病院で出会う前に、地域社会や家庭で孤立する子どもたちに気づくことが

できれば、早期に異変に気づけるかもしれない。「だんだん・ばあ」をつくるきっかけでした。

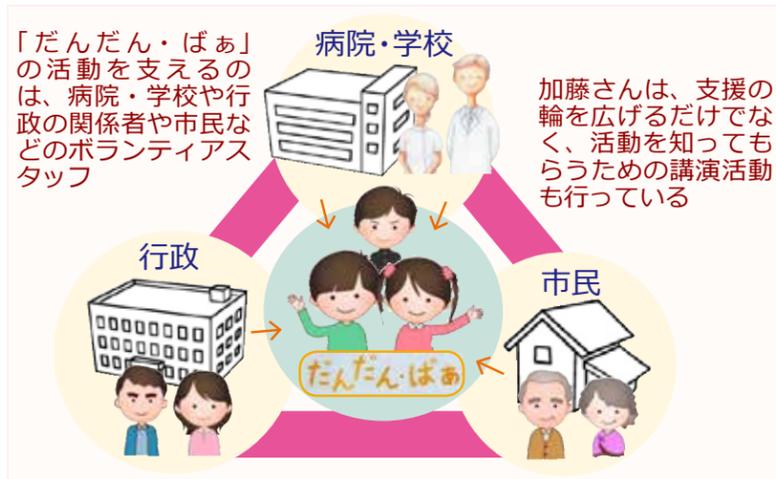
ソーシャルワーカーの仕事は、制度やサービスと患者さんをつなぐ仕事と思われがちです。もちろん、そんな一面もあります。しかし、もう一方で大切なのは、困りごとがある、でも制度やサービスは使えないという方々と、どうすれば解決につなげるか一緒に考えること、そして制度やサービスがなければ作り上げていくのも私たちの仕事だと思っています。ソーシャルアクションの取り組みといえるでしょうか。

子どもの居場所や時間を提供

夕方5時、子どもたちが集まってきます。宿題をしてから遊ぶのがルールで、大人は宿題のサポートや遊び相手をします。最近は、けん

玉大会で子どもも大人も盛り上がりました。

6時過ぎになると皆で食卓を囲みます。食事の準備は、オーガニック食材の弁当販売を仕事に行っている私の友人が中心に行います。子どもたちが、食べることの楽しさを知り、食への関心を深めることも目的です。



活動は口コミなどで広がり、いまでは医師や看護師、三鷹市の職員はじめ虐待防止に関する行政や関連団体の職員、さらに大学生や市民ボランティアの参加も増えてきました。

学生のチカラ

杏林大学の学生や他の大学の学生が「だんだん・ばあ」に興味を示し、活動に参加しています。

知識や経験は、社会で役立ててこそ意味があります。ここは、学生には、学んだことをアレンジして実行できる場になり、子どもたちには、親世代より、歳の近い大人と交流できる場になっています。

大人になっても

「だんだん・ばあ」は子どもたちの人生の通過点。ここで過ごしたことを、大人になって思い出してくれたり、訪ねてきてくれたりするとうれしいですね。



毎回、私の似顔絵を描いてくれる女の子がいます。活動当初は、怖い顔の絵ばかりで、「私ってこんな顔？」とっていました(左)。

ところが最近、どれも笑顔の私(右)。活動当初は無我夢中で、気持ちに余裕がないことが表情に出ていたようです。気持ちの表れを読み取る子どもの鋭さに感心してしまいました

卒業生リレー



異文化・異医療

あかお かずみ

赤尾 和美

(医学部附属看護専門学校 1984年卒)

杏林大学病院で臨床経験を経て渡米。ハワイ州看護師免許を取得し、ハワイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、イラクで医療活動を行う。アジアの恵まれない子どもたちの医療支援を行うフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 事務局代表として1年のうち10ヶ月近くを海外で過ごす。国内外で地域医療に貢献した者を顕彰する2017年度第45回医療功労賞受賞



ラオスのラオ・フレンズ小児病院スタッフ(上)と病院のマスコット

看護師としていま、ラオスで

私はいま、ラオスで医療活動をしています。高校卒業後、体育大学へ進学するつもりでしたが、父親が病気を患い入院。家族の将来や自分が社会で生きていくことを改めて考えたとき、病院で毎日接する看護師という職業に関心をもちました。

杏林大学医学部附属看護専門学校で学んだのち、杏林大学病院で働いていました。

看護師のキャリアを積めたと感じ、仕事や生活のフィールドを友人がいたハワイに移すことを決断。ハワイ州の看護師免許を取得し、ワイキキ保健センターなどで働くことになりました。多様な人種と異文化が共存するハワイは魅力的な場でしたが、7年後、カンボジアの小児科病院で看護部長をしている方から誘いを受け、その病院へ行くことになりました。

不便の心地よさ

カンボジアでは14年間活動しました。アンコール小児病院で診療・教育・予防の確立に努めました。一方で学んだのが、「五感を使って生活する」ことです。

「汚いものを見る」「臭いものをかぐ」…アメリカや日本では隠されていたものを目の当たりにし、忘れていた感覚を思い出したような気がしたのです。

また、早くて便利な生活から、自給自足の生活など、少し不便でも手間を惜みず自分でやってみることを体験すると、不便の心地よさや充実感が味わえます。私はそこに「人が生きる力」を感じます。

異文化には異医療がある

私たちの活動で大切にしているのは「人材を育てる」「根づくものを伝える」こと。

いま、ラオスで質の高い心のこもったケアが提供できる小児病院を確立し、ラオスの国へ残していくというプロジェクトに関わっています。日本の医療の良い点を現地の文化に合うよう改良したり、現地の人々に受け入れられる別の方法を検討したりします。そして、現地のスタッフが引き継げる内容にします。こうすることで、今より救える命は格段に増えるのです。

現地で受け入れられ、根づくためにどうしたらよいか、毎日、毎日考えています。

生きる術も知ってもらう

途上国には、小さな頃から労働を強いられたりして、教育や社会との接点がない子どもたちがたくさんいます。

「知らない」ことは彼らの生活や将来を危うくします。私たちは、治療だけでなく、病気の予防や保健・衛生などの健康教育、栄養教育を通して、自身と家族の健康を守る力を伝えています。

私が重点を置く活動の1つが訪問看護です。ある村で、生活の全てをもらい物に頼る貧しい家族に出会いました。周りの村人に相談すると、皆で知恵やモノを出し合ってくれました。その家族は、鳥小屋を作り、鶏が産んだ卵を売って、わずかですが現金を手にすることができるようになりました。命をつなぐためには生きていく術を伝えることも必要なのです。

患者や家族のケア

現地のスタッフには、「緩和ケア」の概念がありませんでした。ガン末期の患者や家族が心安らかに人生の最後を迎えるために「緩和ケア」はとても大切です。私たちは様々な事情を理解したうえで、「看取り」について時間をかけて話しました。

意識の変化を見たのは、しばらくしてからでした。余命わずかな子どもが音楽好きとわかったら、レコーダーにたくさんの音楽を入れてプレゼントしたのです。

その子は亡くなりましたが、後日、スタッフとともに家族を訪ねると、「ようやく気持ちを切り替えることができた」と心づくしの料理でもてなしてくれました。患者や



ラオスの遠隔地に住む人々を訪ねる訪問看護。「待っている人がいるならどこへでも行きます」と赤尾さんは話す

家族を亡くした人のケアの形はそれぞれです。何かを必要としている人に寄り添うことが大切なことを現地の医療スタッフと一つひとつ共有していこうと思っています。

若いみなさんへ

「行動を起こし、やってみる」ことはとても大事で、たとえ失敗しても学ぶことも多い。相手を知る、小さなことも見過ごさないなど、いろいろな感覚が研ぎ澄まされてきます。私が歩んできた道を振り返ると、多くの場面で導いてくれる人との出会いがありました。こうした出会いのきっかけを逃さないことにもなると思います。

国際医療は、決して「やってあげる」気持ちで取り組まないことです。私は活動を通して現地の人からとても多くのことを学んでいます。

国際医療に関心のある方がいたら、一緒に、現地のニーズに対して私たちに何ができるのかを考えていきたいと思っています。

学部・大学院トピックス

医学部

「どんな医師になりたいか」 1年生から将来設計

医学部では1年次に「医のプロフェッショナルリズムとキャリア形成」という授業で、医師としての多様な働き方や将来設計について学びます。

授業では、研修医や若手・中堅医師などから話を聞いたり、他職種を含む社会人へのイン

タビューを行います。自分は「どんな医師になりたいか」、「そのために6年間をどう過ごすべきか」、体験を通して考えていきます。

1年次の授業、医師の多様な働き方を学び、将来を考える

新しい専門医制度や診療報酬の改定、求められる医療の形など、医療を取り巻く環境は時代とともに変化しています。

1年次の授業「医のプロフェッショナルリズムとキャリア形成」では、仕事と生活の両立を図りながら、医師としての力が発揮できるワークライフバランスを実現するための自身のキャリアプランを考えます。

入学直後に病院体験実習

入学して間もない5月に行われるのが病院体験実習です。医学生として早期に医療現場に接し、医師から話を聞くことで医学生としての自覚を身につけます。

9月には、研修医や医師などを特別講師に迎え、医師として歩んできた道のりを語ってもらいます。



『110人のキャリアヒストリー』

さらに学生は、多様な働き方を知るため、社会人へのインタビューを行います。

2017年度の1年生がインタビューの対象に選んだのは、医療関係者や企業の役員、海外の企業で働く研究者など様々でした。キャリア形成の授業とインタビューを通して得た、110人一人ひとりの気づきやめざす医師像は、『110人のキャリアヒストリー』という冊子にまとめられました。

授業を担当する江頭説子特任講師は『110人のキャリアヒストリー』について、「学生時代にしておくべきことやキャリアについて学生なりに深く考えたことがうかがえます。生涯医師として働くためのヒントがつかめる授業になれば」と話しています。

理想の医師像に近づく6年間

カリキュラムの設計・編成の中心となった岡本晋教授は「医師を取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。医学生にとって、医師になるための知識や素養を身につけることが最も重要であることは変わりありません。しかし、医師も一つの職業です。世の中が求める医師のあり方を理解し、自分の将来を考えてみるのが大切な時代になったと言えます。この授業を通して、医師という職業を個人個人でイメージし、それに備えた医学生時代を送ってもらいたい」と話しています。



研修医マッチング
医学生が行きたい病院を選び、病院側も欲しい学生を選ぶ、いわば医学部の「就職活動」「お見合い」のこと

医師臨床研修 マッチング 3年連続 100%のワケを探る

平成29年度、杏林大学病院で臨床研修を希望する研修医と当院が募集する定員数がフルマッチとなりました。今回で3年連続フルマッ

チとなった研修プログラムを統括する総合研修センター長の赤木美智男医学部教授に、その特長を伺い、研修医に支持される理由を探りました。

杏林など10病院でフルマッチ

医師として診療に従事するには、医師国家試験に合格して医師免許を取得したのち、2年以上臨床研修を行うことが必要です。



今年3月に東京ビックサイトで行われた研修プログラムの説明会。杏林のブースには多くの医学生が詰めかけた

臨床研修希望者は、研修病院が提示するプログラムを見て、希望する研修先を選びます。

平成29年度、希望者と病院を結びつける研修医マッチングで、杏林大学医学部付属病院を含む10の大学病院（本院）で定員を充足するフルマッチとなりました。当院は3年連続のフルマッチです。

特色① 救急・地域医療研修

当院を選んだ研修医は、理由の一つに、多くの症例に接する「救急研修」があることをあげます。

これについて、赤木美智男総合研修センター長は、「病棟での診療と異なり、患者さんが来院した最初の場面から診療に関わることができる救急研修は、診療能力の修得の場として最適です」と指摘。

一方、「長崎県壱岐、五島列島、北海道、秋田県などの病院での地域医療研修・へき地医療研修には研修医の半数以上が参加します。都会の大病院とは全く違った医療を経験できるのも魅力の一つです」と話します。

特色② 積み上げてきた指導体制

さらに赤木センター長は、研修医への指導体制について次のように話します。「杏林の先生は、熱心に研修医を指導します。当院は患者中心のチーム医療を推進しているため、診療科どうしの連携や様々な職種の協力体制が確立されています。病院全体で研修医をはじめ後輩をよき医療者に育てる文化が形成されています」。

そして、「杏林で研修をした人が指導す

る立場になっていることもめずらしくありません。そうした人が、いま、自分が受けた指導の経験を活かして研修医を指導しています。長年の取り組みが浸透してきた結果でしょう」と分析します。

研修の充実と熱意ある指導

今後の研修について赤木センター長は、「患者さんへの接し方、診察の仕方など研修医のパフォーマンス評価をより正確に行える対策を取り入れたい」としています。

そして、「人を育てることは、すぐには結果が出ないこともあり、根気と情熱が必要です。よき医師として活躍してもらうために、これからもできることをしっかりとやっていきたい」と話しています。

キャンパス紹介

総合情報センター

井の頭キャンパス F棟4階



- 主な業務
・PC室、貸出しPCの管理
・UNIPA（学生支援ポータル）等のパスワード管理
・CRV（携帯電話を使った授業支援）システムに関すること
・大学のメールアドレスの発行
・校内のネットワークインフラの管理 など

ICT（情報通信技術）のインフラを支える

総合情報センターの一番重要な仕事は、校内のネットワークインフラの管理です。

出席システム、学生ポータル、プリント管理、PC教室、貸出し用ノートパソコン、成績証明書、eラーニング等を動作させるために、常時80台以上のサーバーを動かしています。

学生ポータルやeラーニングは、学外からもアクセス可能で、学生は常に利用できます。そのため24時間体制で動作を見えています。

PCの動作が遅くなる、不安定になる等の事態が起きた時は、すぐに迂回措置をとります。そのため、学内すべての情報コンセントの配置や系統も把握しています。

もっとも重大な脅威が外部からの攻撃です。そのため集中的に1週間、土日や夜間も使って脆弱性への対応を行うこともあります。

様々な手口で攻撃を受けてもサーバーが乗っ取られたり、ネットワークがダウンしたりしないよう、常に注意しています。攻撃の手法は日々進化しているので、防御パターンを毎日更新しています。

さらに教員や事務職員のパソコンはウィルス対策のアプリケーションに加え、ファイアーウォールというネットワーク上の防護壁も立てて防御しています。

今やネットワーク環境がないとすべてが滞ってしまいます。大学では、電気・水道・ガスと同じくらい重要なライフラインです。これを維持するのが最大の任務です。

学生の必需品ノートPCの貸出しとWi-Fi環境の整備

センターは、コンピュータ室の管理と学園全体のネットワークの管理・運営も担っています。

学内のコンピュータ室は、井の頭キャンパスに6室（パソコンは計293台）、三鷹キャンパスには2室（同60台）あります。授業で使われていない時は、学生が自由にインターネットを使って調べものをしたり、レポートを作成したりできます。もちろん、パソコンの操作やパワーポイント等、ソフトの使い方についての指導もしています。

井の頭キャンパス限定で、当日に限りノートパソコンの貸出しをしています。保健学部PCロッカーで20台、図書館PCロッカーで58台、総合情報センター事務室で30台です。これら貸出しロッカーのほか、各棟のコンピュータ室や無線LAN(Wi-Fi)



井の頭図書館にはインターネットとWord、Excel、PowerPointが使える、印刷もできるノートパソコンが58台ある。ノートパソコンは貸出しロッカーから取り出して使う。利用時間は開館から閉館15分前まで。館内でのみ利用

などの管理もしています。

三鷹キャンパスに待望の無線LAN

この3月には三鷹キャンパスの学生から要望の強かった無線LAN設備を講義棟と看護医学教育研究棟の学生ホールに設置しました。

学内ネットワーク環境の整備のために常に最新の情報も入手しています。

学部・大学院トピックス

保健学部

“心に寄り添い” チーム医療に貢献 臨床心理学科が誕生

保健学部は9つ目の学科として、2018年4月に臨床心理学科を開設しました。臨床心理学科は2018年秋に始まる国家資格、「公認心理師」の取得をめざします。

公認心理師とはどのような資格で、どのようなところで活躍が期待されるのか。そして、杏林大学保健学部で学ぶメリットなどを紹介します。

いま求められる人文科学と自然科学の視点を持つ心理職

1995年に起きた阪神淡路大震災。これをきっかけに、わが国では災害時でも精神的な支援の重要性が広く認知されました。東日本大震災でも心のケアチームが活動しています。

昨今、SNSの普及によって、対面でコミュニケーションをとることが希薄になり、即時に「正解」を求めたくなる傾向が強まっています。そうした現代に生きているからこそ、人と人が直接、そして時間をかけてかかわることによって心が育まれたり、元気になったりすることを学ぶ必要があります。そして、身体と心は密接に関係していることについて知識を深め、そのような視点と保健医療の基礎知識を持つ心の専門家がますます必要になっています。

保健医療の分野に強い杏林大学には、心と身体の健康を専門とする公認心理師を養成する環境が準備されています。

公認心理師とは

「公認心理師」は心理職初の国家資格で、2018年9月に第1回目の国家試験が実施されます。杏林大学ではさらに大学院で2年間学ぶことにより受験資格が得られます。

「公認心理師」は、既に国家資格である医師、看護師、

精神保健福祉士などと同様の医療分野に加えて、教育、福祉、産業、司法など幅広い領域で心の専門家として人々の心の健康のために仕事をしていきます。

分野	想定される仕事の場
保健医療	病院、クリニック、保健センター、介護施設 など
教育	学校、教育委員会 など
福祉	児童相談所、福祉施設、社会福祉協議会 など
産業・労働	健康管理センター、相談室 など
司法	裁判所、刑務所、保護観察所 など

公認心理師の仕事と役割

心の専門家である公認心理師は、人の心に耳を傾け、気持ちに寄り添うことが専門性の基盤となります。それだけに活躍の場は多岐にわたります。

医療の場においては、患者さんやご家族の気持ちを理解し、心の健康をサポートしていきます。そして「チーム医療」の一員として、医師や看護師など多職種と連携していきます。

これまでは心理職に国家資格がなかったこともあり、チーム医療に参画できる機会は限られていました。これからは、チームの要としての役割が期待されます。

職場や学校などにおいては、うつ状態だったり、“生きにくさ”を感じたりして苦しんでいる子どもや大人とのカウンセリングなどを行います。



カウンセリングの様子

司法の分野では非行や犯罪の防止に関わる心理相談、及び、被害者の心のケアなどに携わります。

杏林大学で学ぶ強み

公認心理師を教育するカリキュラムでは病院実習が必須です。各分野において高度な機能を備えた医学部附属病院を持つ杏林大学の大きな強みです。

保健学部は9つ目の学科として新設された臨床心理学科は、既設の学科（健康福祉学科、救急救命学科、臨床検査技術学科、臨床工学科、理学療法学科、作業療法学科、看護学科、診療放射線技術学科）と医学部など、他職種の専門家をめざす学生たちが学んでいることや彼らの考え方に触れることができます。

これらの経験は、将来、多職種の専門家たちと仕事をするとときに生きてくるでしょう。

杏林大学での学びを通して、心に深い関心を持ち、多様な考え方や価値観に接し、コミュニケーション力にも優れた公認心理師が育ち、質の高い医療の提供につながることを期待されています。

教員の横顔 臨床心理学科では12人の教員が授業、実習、研究を指導します。ここでは2人の教員からのメッセージを紹介します。

※2018年4月からの職位



学科長・教授
古川 佳子 フルカワ ケイコ

東京大学工学部卒業、東洋英和女学院大学人間科学研究科修了。(例) 東芝、Human Dynamic Asia Pacific Ltd.、東京都立学校スクールカウンセラーなどを経て、2015年杏林大学に着任
【研究分野】 臨床心理分野

心の危機的状況は一人ひとり異なります。深夜に家族の帰りをたった一人で待つ小学生にそっと寄り添う……、企業の第一線でバリバリ働く方の「どうしても会社に入れない」と震える声に応える……、心理職の仕事場面の一角です。

心理職の主な職場である相談室は外界から見れば小さな空間ですが、その中で心は守られ、癒され、回復していき

ます。杏林大学の臨床心理学科は、「公認心理師」国家試験の開始と同時に産声をあげます。

文系の臨床心理学科とは異なり、保健医療分野の知識を基盤とし、基礎心理と臨床心理を主軸とする、体系だったカリキュラムのもと、新たな心の専門家「公認心理師」のパイオニアをめざす皆さんの入学をお待ちしています。



教授
中島 亨 ナカジマ トオル

東京大学医学部卒業。東京大学、帝京大学、国立精神・神経センター武蔵病院勤務を経て、2002年杏林大学に着任。2007年医学部准教授
【研究分野】 臨床神経科学、睡眠障害

医療の現場ではチーム医療が重視されています。

すなわち、患者さんの複雑な状況に対し、各分野の専門職が対応して全体として良質な問題解決を目指す形の治療方式です。

これまででも、看護職をはじめとして多くの医療スタッフがチーム医療を担っていますが、要請が多いにも関わらず心理の国家資格は存在しませんでした。

公認心理師は精神科領域での種々の心理療法のほか、小児や高齢者の心理アセスメント、さらに教育場面、産業領域、福祉領域、司法領域での活躍も期待されます。

将来は多くの場面での支援に関わり、全人的に人間に関わっていく職となることでしょう。



1～4年次の学外実習

4年生 「総合実習」「ボランティア活動」など
これまでの学びをまとめる総合的な実習やボランティア活動などを行う

3年生 「心理実習Ⅱ」

保健医療、福祉、教育などの分野で実習を行い視野を広げる

1・2年生 「基礎実習」「心理実習Ⅰ」

病院での見学を中心に、臨床の場での役割について理解を深める

杏林大×JICA 共同プロジェクト

オール杏林でHIV感染者ケアに取り組む

タイで2年間のプロジェクト開始

杏林大学と国際協力機構（JICA）が政府開発援助として共同で実施する2年間のプロジェクト「北タイの保健センターにおけるHIV感染者ケアの強化事業」が2017年10月からタイのチェンマイ県サンパトン郡で始まりました。

事業のプロジェクトコーディネーターは、1997年よりタイで保健医療分野の調査活動を実施し、開発途上国におけるHIV/エイズ患者の医療を研究する総合政策学部の北島勉教授です。

現在、サンパトン郡には約1,200人のHIV感染者がおり、サンパトン地域病院や同郡内の17カ所の保健センターで、医療サービスを受けています。

杏林大学とチェンマイ県衛生局は、保健センターの看護師のHIV感染症ケアに必要なスキルの向上、地域病院と保健センター間の患者紹介の仕組みの改善を進めるプロジェクトに取り組むことになりました。

両国の違いを認識 新たなケアのあり方を探る

昨年12月、北島教授は医学部総合医療学教室感染症科の河合伸教授と附属病院のHIV/エイズコーディネーターナース 佐野麻里子さんとともに、サンパトン地域病院で研修会を開催。河合教授と佐野看護師は、同院の医療スタッフと保健センターの看護師約30名を前に、日本におけるHIV/エイズの治療・管理やHIV感染症の状況、医療サービス提供の仕組み、杏林大学病院

での診療とケア、コーディネーターナースの役割などを紹介しました。

治療薬の決定時に患者の意向を聞く、病気や薬に関する詳細な情報を患者に提供するなど、日本では一般的なことも、現地では行われていませんでした。また、アルコール依存や薬物使用と治療の問題、病院と保健所の連携、医療費の患者負担についても相違がみられました。

参加者は、今回の研修で得た情報をふまえ、保健センターを中心とした新たなHIV感染者へのサービスシステムの構築に関する提案や施策について意見を交換しました。

HIV対策を確実に進める

プロジェクトの実施期限は2019年10月。専門家や関係機関の協力を得て、現地スタッ



現地のスタッフと打ち合わせをする(左から)河合教授、佐野看護師、北島教授

フとともにHIV感染者ケアの強化とHIV対策が確実に進められることをめざします。

プロジェクトについて北島教授は、「保健センターでもHIV感染者に適切なケアを提供できる、職員対象の研修プログラムと患者紹介の仕組みを構築したい。そして最終的には、タイの他の地域や周辺国でも活用してもらえるような成果を出したい」と意気込みを語りました。

学部・大学院トピックス

総合政策学部

八王子市長へ提案!

大学コンソーシアム学生発表会で優秀賞・奨励賞を受賞

第9回大学コンソーシアム八王子学生発表会（主催：大学コンソーシアム八王子、後援：八王子市教育委員会）が、昨年12月9日（土）・10日（日）、八王子学園都市センターで行われ、久野新ゼミのグループが優秀賞、木暮健太郎ゼミのグループが奨励賞を受賞しました。

学生発表会は日頃の研究成果などを八王子の企業、市民に発表できる場です。今回の発表会は各大学等から計174グループが参加し、研究発表や提案をしました。本学からは他に、田中信弘ゼミ、半田英俊ゼミから合わせて7グループが参加しました。



優秀賞 八王子発「省力型」人材マッチング制度の提案
中小企業と就活生双方の負担軽減をめざして
発表者：市村 優典、大國 真紀、高野 真衣、高橋 凌、長谷川 貴一、平井 貴大

奨励賞 高尾山着せ替え作戦
発表者：小岩 真生、近藤 佳、鈴木 幸香、根津 佳明、橋本 真希

【提案内容】

人手や資金不足のために効果的な採用活動を行えない中小企業の課題と、時間や資金の面などの厳しい縛りの中で就職活動をせざるを得ない学生の課題を同時に解決する「八王子発『省力型』人材マッチング制度の提案」で新たな仕組みを提案。
具体的な提案は、
1、米国では広く普及しているWEB面接システム
2、記載に非常に負担が大きいエントリーシートの標準化・電子化
3、エントリーシートを共有する仕組みを作成することで中小企業から学生にアプローチできるようにする逆指名制度
4、個別に実施されている筆記試験の合同実施
5、八王子エリアに相当数居住し、国内の労働力として期待できる留学生向けの人材マッチング、の5点。

提案を通して 中小企業の魅力を知る
代表 長谷川 貴一

私たちがこのテーマを選んだのは、就職は学生に大きな関心事である、八王子は学生と留学生が多い、国内外で人材マッチングが注目されている、ことが理由です。
まず就職活動用サイトから、求人に関する基本的な知識や現状等を調べました。次に八王子市内の中小企業や市役所を訪問し、採用活動や問題点を直接伺いました。さらに人材マッチングを実施する中小企業約40社へ電話取材を行いました。
企業を訪問したり、電話をするのはとても緊張しましたが、約7割から回答を得ることができました。
中小企業が学生にアピールしたい高い専門性など、学生が知らないだけで、大きな魅力だと感じました。
発表では先事例や運営体制、その効果の検討結果も含めました。講評では八王子市長から着眼点が良いと評価いただいたほか、名刺をくださった企業もありました。

【提案内容】

世界的な旅行ガイドブックに載るほど有名な観光地、高尾山。しかし、観光客は近年やや減少傾向にある。特に2月、3月はそれが顕著だ。
「高尾山着せ替え作戦」は、イルミネーションで高尾山をライトアップするもの。冬のイベントとして、観光客増加をめざす。
イルミネーションを用いたイベントには神奈川県のおぼろ祭り、山口県の七夕ちょうちんまつり、広島県翁山や徳島県眉山などが有名だ。これらのイベントではちょうちんやLEDを利用している。
高尾山では、コットンボールを使う。これは、色とりどりの毛糸でできた提灯のようなもので、大きさは手穂程度。中にLEDの電球を入れて光らせ、ケーブルカーやリフトの線路沿いに設置し、幻想的な雰囲気を演出する。このコットンボールライトを地域住民が手作りすることで、地域の連帯感を深め、活性化させる効果も期待できる。イルミネーションの設置方法などは先述のイベントを参考にした。資金面についてはクラウドファンディングを提案した。

企画・提案の難しさを知る
代表 小岩 真生

八王子市にある高尾山は、都心から電車で約1時間と近く、多くの観光客や登山者が訪れます。しかし、冬季はその数が激減。私たちはこの時期の集客対策を考えました。
既にイルミネーションを使ったイベントを実施している自治体や観光協会に問い合わせ、準備や実施の方法、広報活動などを伺いました。
私たちが力を入れたのはイルミネーションです。誰でも簡単に作ることができ、環境にやさしいもの。たどり着いたのが、コットンボールライトでした。発表では試作品を壇上にディスプレイし、皆さんに見てもらいました。
「実現の可能性がある」「高尾山の自然を大事にするためにもう一工夫ほしい」などアドバイスを受けました。
企画・提案を実現させるためには、多くの人が関わることや、様々な視点や工夫を重ねる必要があることがわかりました。

在学生紹介

難関を突破し、憧れの皇宮護衛官に
さいとう たくみ 齋藤 拓巳
総合政策学部4年 (皇宮警察内定)



皇宮護衛官に内定し、4月から6ヶ月間、皇居内の警察学校で訓練が始まります。
白バイやパトカーで颯爽と走る警察官に小学生の頃からあこがれていました。武道の経験があったほうがよいと思い、高校3年生のときに柔道初段を取得しましたが、警察官を目指して勉強を始めたのは大学3年生からです。
それまでは、小学生

で始めた野球を大学でも続ける野球漬けの日々を送っていました。杏林大学硬式野球部は強豪ひめく東京新大学野球連盟1部に所属しています。2年生の冬からは学生コーチとしてグラウンドに立ち、新人戦では学生監督も任されました。荻本有一監督のそばで選手への目配りや起用、采配を学ばせていただいたことは、貴重な経験でした。
学生コーチをしているときは、午前中は八王子キャンパスのグラウンドで選手と練習、午後は井の頭キャンパスで授業、放課後はまた八王子へ戻って練習をしていました。
3年生の7月、公務員試験の勉強に本格的に取り組むため、後輩の学生コーチに自分が身につけたことを引き継ぎ、野球部を

引退。キャリアサポートセンター(CSC)の就職支援プログラム「警察官等公務員サークル」で情報収集をしたり、試験対策をしたりしました。また、専門学校にも通い、公務員試験の勉強も始めました。
皇宮護衛官という職種を知ったのは、この頃です。仕事の内容などを警察官サークルで指導して下さるCSCの藤岡明子さんから聞いたり、説明会に参加したりして任務について理解を深めるにつれ、とても誇れる職業だとわかりました。
採用試験では、申込者が1,700人を超える中、最終合格者は42人という狭き門を突破し、内定をいただきました。野球を頑張ってきたこと、学生コーチとしてチームをまとめてきたことを高く評価してもらったように思います。



皇宮警察は、天皇陛下を始め皇族各殿下の護衛と皇居 御所等の警備を担う。写真は交代の儀式を行う儀仗(ぎじょう)隊。儀礼的な側面をもつ業務も行う
杏林大学からは10数年ぶりの皇宮護衛官内定者だと聞きました。訓練はとてつもないようですが、杏林の後輩達に道を拓くことができるよう頑張りたいです。
警察学校を卒業後は皇居などの警備にあたります。ゆくゆくは皇族の方々の身辺をお守りする側衛官になることが目標です。

学部・大学院トピックス

外国語学部

観光分野や国際貢献 実践カリキュラムで活躍の舞台へ

2017年の訪日外国人数は前年比約19%増の2,800万人超(日本政府観光局統計)となり、今後さらなる増加が予想されます。観光産業の需要や異文化交流の機会も増加し、観光業界の人材育成や異文化への対応力がさらに求められています。

観光交流文化学科では、その基本となるホスピタリティやコミュニケーションの力を養い、観光分野の研修などを通して実践力を磨いたり、海外研修を通して異文化の理解や国際協力への考察を深めていきます。基礎となる必修科目や実践力を高める選択科目を紹介します。

「ホスピタリティ・コミュニケーション」



しむらよしひろ
外国語学部教授 **志村良浩**
日本航空株式会社で空港の旅客業務、国内線乗務を経て国際線客室責任者として乗務。客室部門のサービス品質、教育訓練、乗員サポートなどの各部門長を歴任

外国語学部では1年次に半年間、「ホスピタリティ・コミュニケーション」の講義を通じて、ホスピタリティの概念やホスピタリティのマインドを形にして表現するた

めの知識やスキルを学びます。

まず、サービスとホスピタリティの違いとして、serviceは相手に仕えるという意味である一方、hospitalityは相手を思いやり、受け入れることによってお互いが満足できる関係の構築をめざすという基本的な概念を理解します。その上で、挨拶や笑顔、身だしなみ、言葉遣い、所作・姿勢が相手に与える印象を理解し、実技演習でマナーやエチケットを身につけ、相手のニーズを



お辞儀の仕方を練習する。「失敗した時はきちんと説明し、真摯に謝ることが相手との信頼関係を築くことにもつながる」と志村教授は話す

くみ取り、相手の心に寄り添うとはどのようなことかを学びます。

講義は接客の現場経験が豊富な複数名の講師が担当します。現場の話を聞くことは、学生たちにとってホスピタリティ業界の仕事やホスピタリティの実践のしかたなどを具体的にイメージする足がかりとなります。

ホスピタリティコミュニケーションは、ホスピタリティ産業のみならず、普段の生活においても円滑な対人コミュニケーションを図る上で必要不可欠となるものです。学生たちは大学に入学した年次にこの講義を受けることで、社会人としての第一歩を踏み出します。

「フィールドスタディⅢ」 エアライン・ホテル業界を体験

実施期間：2月上旬の3日間

目的：施設見学や体験学習を通して、空港・エアライン・ホテルの仕事を具体的に・多面的に理解する。

概要：集中講義型校外学習プログラム「フィールドスタディⅢ」では、普段は入れない空港施設や一流ホテルの舞台裏を見学し、現場のスタッフと交流する。

羽田空港では格納庫見学の他、客室乗務員や地上係員の業務説明を受けながら職場見学を行う。東京＝大阪の往復のフライトでは乗客の視点で機内サービスの目視確認を行う。伊丹空港では施設の見学や業務に関する講習を受講する。大阪市内のホテルでは、多彩な仕様の客室や宴会場、チャペルを見学。さらにスタッフとの意見交換を通してホテル運営の仕組みや業務を学ぶ。



羽田空港 JAL 整備工場で格納庫を見学

ホスピタリティとエアライン業界への考察を深め、客室乗務員に

観光交流文化学科 4年

小野寺 たゆ

(日本航空株式会社 客室乗務員内定)



志村ゼミナールに入ったことがきっかけでエアライン業界への関心が高まりました。3年次にJAL施設のフィールドスタディに参加し、空港とホテル双方の現場を垣間見ることで、仕事のイメージが具体的にになりました。有事の際に乗客を誘導する訓練を体験したこと、「乗客の安全を守ることが最大の任務」と話す客室乗務員の方など、とても印象的でした。内定をいただき、お客さまの安全を守り、快適な空の旅を提供することへの自覚が芽生えてきました。1年次に「ホスピタリティ・コミュニケーション」で学んだ、相手への配慮や細かなマナーの実技などの大切さを今改めて実感しています。

これから客室乗務員として、外国人の方に接する機会も増えますが、自分の持っている価値観で相手を見るのではなく、一人ひとりの求めるものを理解し、柔軟に対応できるように努めていきたいと思っています。

「フィールドスタディⅣ」 異文化交流、国際協力に触れるタイ研修

実施期間：2月上旬の約10日間

目的：タイ最北の地チェンライの少数民族の暮らしや文化を体験しながら、多文化共生や国際協力について学ぶ。

概要：2017年の研修では、学生13名が参加。現地の家庭にホームステイし、幼稚園などでのアクティビティを企画・実施するほか、貯水タンク建設のボランティアを行った。

このプログラムは、タイの山岳少数民族の生活の向上・文化継承などのサポート活動を行っているNGO法人ミラー財団の協力を得て、本学独自のプログラムとして実施。



村で唯一の貯水タンク作り

ホスピタリティコミュニケーションの核を体験

観光交流文化学科 2年

松本 暁登



幼少期に海外で暮らしていたこともあり、異文化交流への関心は昔からありました。

ホームステイをした少数民族、アカ族の生活では、入浴は桶に汲んだ冷水を身体にかけるだけ。子どもたちが可愛がって飼育していた鳥は、家の外にある調理場で料理され、食卓にあがる。高齢者は部族の言語のみを使用し、タイ語や英語は通じない。言葉でコミュニケーションがとれないため、相手の考えや求めていることを感じ取って交流する、ホスピタリティコミュニケーションの核を実体験してきました。

わずか10日間の滞在でしたが、貧しい相手を支援するという一方的な視点ではなく、現地の人に寄り添い、相手が求めることをサポートする大切さを学びました。

わたしの書棚から

「私の一冊」「人生を変えた本」「私の読書法」など、教職員が自由なテーマで思い出の本を紹介。お薦めの一冊から読書の楽しさを実感してみませんか。

新書の楽しみ

ちはらのぶよし
総合政策学部教授・図書館井の頭分館長 **知原 信良**

4年ほど前に総合政策学部と外国語学部の教員にお願いして、冊子『学生に読んでほしい100冊』を図書館で刊行した。そこで私は、『大岡越前守忠相』(岩波新書)、『ゾウの時間ネズミの時間』(中公新書)、『砂糖の世界史』(岩波ジュニア新書)、『松下幸之助 経営の神様とよばれた男』(PHP文庫)、『世界で一番いのちの短い国』(小学館文庫)、『零の発見』(岩波新書)の6冊を推薦した。

最近ではスマホで本も読める。電子本は持ち運びも簡単でかさばらない。しかし、私は今なお紙の本が好きだ。本を読む醍醐味は自分の知らない世界をのぞくことにある。大学で教員をしていると専門は何かとよく尋ねられる。専門は自分なりに意識しているが、実は専門外が楽しいのである。それができる本がいわゆる新書だから、私は新書が好きだ。しかし、分野が多岐

にわたっているので本棚をみても統一性はない。

中でも、海外紀行・調査ものが気に入っている。『エビと日本人Ⅱー暮らしの中のグローバル化』(岩波新書)は、『エビと日本人』(同、1988)のその後20年をたどっている。エビ好きの日本人に、養殖エビを供給する地域が東南アジアから中南米諸国にも拡大していることなどを描いている。日常生活のグローバル化を考える好著である。

『自由と規律』(岩波新書)は70年近く前に出版された本だが、今なおお色あせない。英国人の基本的な人格形成は大学就学前のパブリックスクール教育にある、と自身の体験をもとに描いている。

最後に『ルワンダ中央銀行総裁日記 増補版』(中公新書、2009)。1972年の初版の増補改訂版で、アフリカ東部の小国ルワンダを通じて、日本とアフリカ諸国のつきあい方を考えることができる。

読書からみえるもの

むらべたえみ
学生相談室長・保健学部教授 **村部 妙美**

考古学者ハインリヒ・シュリーマンの『古代への情熱』。これが最初に思いついた本でした。自分の夢を追い求め、資金と語学力を得、トロイアの遺跡発掘にたどり着くまでの自叙伝です。数々の発見も、道のりは険しく迷路や暗がりを探り進められない。途方もない夢を捨てず、自分を信じ続ける姿に勇気もらったことを覚えています。考古学者は今でも憧れます。

次に魅かれたのは推理小説。江戸川乱歩、コナン・ドイルなど定番を読みあさるうちに、同じ空間で同じ事象を共有している、物語はひとによって異なり、世界をどうとらえるかは経験や知識、理解力によって大きく変わることがとても魅惑的でした。余談ですがベネディクト・カンバーバッチ主演のドラマ「シャーロック」は一押しです。

トーマス・クーンの『科学革命の構造』のパラダイム論(論議はありますが)や、中村雄二郎の『臨床の知とは何か』には、固定観念にとられない姿勢、実践と経験を重んじる哲学観があります。柳田邦男の『マリコ』は、開戦間際の数奇な運命の家族の思いと自分たちの為すべきことを模索する姿勢に感銘を受けました。

しかし人は時には後ろ向きになるものです。努力しても手ごたえのない時。頑張る気力さえもなくなると。集中力が落ちて活字が頭に入らず、大好きな音楽もノイズでしかなくなる時。おすすめなのは写真やイラストの多い本です。ミヒャエル・エンデの『モモ』や小泉吉宏のブッタとシッタカブッタシリーズは、カウンセラーの間でも定評のある本です。心にしみわたる言葉に出会えます。心と体をほぐすには、貝谷久宣、福井至監修の『図解 やさしくわかる認知行動療法』が手引書として役立ち、少し気分を楽にしてくれます。試してみてください。

※2018年4月からの職位



金田一 教授の研究室から ⑱

金田一 秀穂 (きんだいちひでほ) : 1953年東京生まれ。東京外国語大学大学院修了。中国大連外語学院、米イェール大学、コロンビア大学などで日本語講師。1988年より杏林大学外国語学部で教鞭をとる

井中の蛙



井中の蛙というのは、身の回りの狭い世界の中のことしか知らないのに、自分がとても賢く偉くなったかのように錯覚してしまっている人のことを言う。中国の古典、荘子にある言葉である。世の中は広いのだ、世界は自分が生きている世界だけではないのだよと教えてくれる。

教師はしばしばこれに陥りやすい。世間の人が、「先生、先生」と呼んでくれて、敬意を表してくれる(場合がある)。教室に入れば、教師は独裁者であるから、学生はみんな言うことを聞いてくれる(ような気がする)。自分の言うことだけが正しくて、世論やマスコミの意見などを散々馬鹿にしても、黙って聞いてくれる(ように思える)。自分ほどこの世界のことをよく知っていて、理解し、きちんと正確に分析できる人はいない(と確信する)。自分以外のたいいてい人は愚か者である(と信じてしまう)。

しかし、ふと気づいてしまうことがある。少しでも本を読んでいると、特に古典などを読んでしまうと、人類史上にはとてつもなく賢い人たちが星の数ほどいて、おのれがその中でも最底辺に属することを思い知らされる。真つ当な自己観察力がちょっとでもあれば、たいいてい

の人は自分より頭がいいことがわかる。数段聡明である。必然的に、自信喪失、自己嫌悪に至る。

しかし、そんな絶望的な人間にも救いの言葉がある。井の中の蛙には、続きがあった。井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さを知る、という。荘子より後の誰かが勝手に付け足したらしい。

すべての人は皆、それぞれ井の中の蛙である。大海を知っている人など、たぶん一人もいない。けれど、ぼくらには狭い井戸壁の上のまぶしい空の蒼さは見えている。あの高い空を知っているから、高い志は持つことができる。

せめて、そのように思いたい。



健康ひとくちメモ ⑲

お刺身と寄生虫



昨春、芸能人が相次いで感染して話題になった「アニサキス」。皆さんは実物をご覧になったことがありますか？

アニサキスは寄生虫の一種で、その幼虫(体長2~3cm程)がサバやサケなど多くの海産魚類の内臓表面や筋肉内に寄生しています。感染魚を生でヒトが食べると胃や腸に穿入し、数時間から数十時間後に激しい腹痛を起こすことがあります。

わが国では1964年に第1例が、その後、多数の発症例が報告されました。国立感染症研究所によれば、現在、アニサキス食中毒の患者数は毎年約7,000人と推計されています。多くは胃アニサキス症で、虫体を内視鏡鉗子で摘出します。

アニサキスほど症例は多くありませんが、マスやサケなどの生食によって感染するのが日本海裂頭条虫です。聞き慣れない名前ですが、一般に言われている「サナダムシ」の仲間です。生の魚肉に潜んだ幼虫はヒトに侵入すると腸管に定着・寄生して、数ヶ月ほどで体長が10mにも達するものがあり、放置すれば数年にわたって私達が摂取した栄養を横取りします。年間推計症例数は100~200例。この寄生虫には特効薬があるので、感染が特定されれば容易に駆虫できます。

一方、最近、新たに食中毒の仲間入りをしたクドア食中毒は、クドア・セプテンツ

ンクタータというヒラメの魚肉に寄生する寄生虫が原因の食中毒です。2008年頃から養殖ヒラメの刺身を食べた数時間後に激しい嘔吐や下痢を起こす症例が相次ぎ、2015年頃までに症例が千数百例に達しました。この寄生虫は、2010年に新種記載されたばかりでその生活環などはまだ不明ですが、養殖水槽などに繁殖したゴカイ類とヒラメとの間で行き来して増殖するのではと考えられています。厚生労働省の指導もあって、現在では、日本産の養殖ヒラメの感染は激減しています。

第二次世界大戦直後には国民の7割が寄生虫卵を保有していたわが国ですが、様々な対策が功を奏して多くの寄生虫疾患が姿を消しました。しかし、国際交流の活発化やグルメ嗜好の高まりから、輸入寄生虫感染症や食品媒介性寄生虫感染症が増加する新たな問題が生じています。

食品由来の寄生虫は、食品の完全加熱または完全冷凍処理で予防できますが、日本人に新鮮な刺身を食べるなどというのは無理なこと。寄生虫の存在をよく認識し、賢く食生活を享受することが肝要です。

(小林 富美恵 : 杏林大学医学部感染症学(寄生虫学部門)・教授)

こばやし ふみえ

浜松医大にて学位取得後、米国ハーネマン大学(現ドレクセル大学)医学部、ウイスコンシン大学医学部にて博士研究員、杏林大学助手・講師・准教授を経て現在に至る



クラブ・サークル紹介

井の頭・三鷹両キャンパスで活動するクラブ・サークルのうち、今回は、スキー部と華道部を紹介します。

● スキー部 一面の銀世界を風を切って滑走



部員は男子16名、女子6名。滑降、回転、スーパー大回転など規定のコースで速さを競うアルペンスキーを中心に取り組んでいます。

一流選手のコーストータルの平均スピードは100km/hを超えるアルペンスキー。冬季オリンピックの中継でその迫力を感じた人も多いのではないのでしょうか。

部員は、経験者だけでなく、初めてスキー板に触れる人や他の部活と兼部している人など様々です。一人ひとりが個性を十二分に発揮し、互いに尊重し合える雰囲気大切にしながら活動しています。

12月と3月初旬に長野県でスキー合宿を行い、3月の大会に臨みます。4月~12月中旬のオフシーズン中は、柔軟性を

高めるためのストレッチ、フォームの確認などを行い、競技に必要な体幹を鍛えたり、基礎体力の向上をめざしたりします。

東海大学や新潟大学などの学生と合同練習をしたり、3月下旬の関東圏の医療系大学が集うAll Medical Ski Cupに参加したりして、他大学との親睦も深めています。

今年3月、長野県菅平高原で東日本医科学生総合体育大会が開催されました。個人成績は男子回転競技11位、総合成績では男子13位、女子21位でした。悪天候や選手の怪我にも見舞われましたが、部員同士でサポートし、全身全霊で大会に臨むことができました。来シーズンはより一層の活躍をめざして、部員一同励んでいきます。(主将/医学部3年 池嶋 俊亮)

● 華道部 四季折々の美で地域の人たちとつながる



保健学部・総合政策学部・外国語学部の女子学生15名で月2回、華道(華道家元池坊)を井の頭キャンパスで学んでいます。

いけばなの歴史や花型、花にあった花器の選び方などは、顧問であり華道教授の資格を持つ保健学部の楠田美奈先生から教わっています。

華道の魅力は、四季折々の自然を味わえることや「美しいものを美しいと感じる心」を育めることです。また、部員同士で作品を見せ合い、お互いの作品の良さを伝えあうことを心がけています。

定期的な井の頭図書館内での展示だけでなく、池坊華道会が主催する花展で作品を展示したり、地域の高齢者施設で入居者さんと一緒にいけばなを楽しんだり、商業施設

設アトレヴィ三鷹で年末年始に展示するなどの学外活動も行っています。

アトレヴィ三鷹での展示は、展示2か月前から、デザインや花を決めるなどの準備を行いました。完成した大小合わせて13の作品は各店舗にも飾られ、スタッフやお客様に喜んでもらえました。大きな年賀状をモチーフにした作品は、子ども連れのご家族に喜ばれたほか、「華道を習っていた女学生の頃を思い出す」と話しかけてくださる方もいました。花を通じて社会人や地域の方と交流することができ、温かな気持ちになりました。

これからも華道で養った感性と、華道を通じた出会いを、少しずつ増やしていきたいです。(部長/保健学部2年 井奥 真菜)

2018年度 大学行事・イベント (2018年4月~2018年11月) ※予定

- 4月5日(木) 授業開始
 - 4月8日(日) 入学式【春】
 - 6月9日(土) 杏会総会(保健、総合政策、外国語学部)
 - 7月26日(木)~8月4日(土) 定期試験
 - 8月5日(日)~9月14日(金) 夏季休暇
 - 9月13日(木) 卒業式・学位記授与式【秋】
 - 9月15日(土) 入学式【秋】
 - 10月6日(土)、7日(日) 杏園祭
 - 11月11日(日) 創立記念日
- *学部により授業開始・終了、定期試験、夏季休暇など異なります



井の頭キャンパスが開校して3回目の春を迎えました。近隣のご理解をいただき、通学手段や最寄駅の分散もほどよくあって、井の頭スタイルが定着しつつあります。新入生を迎える4月は近隣住民からお叱りやご意見をいただく季節でもあります。バスの車内での市民の方々の何気ない会話にも思わず背筋が伸びます。

土曜日の午後、暖かい春の陽が差し込む学長室でのインタビュー。「大学でもっともっと学びたいな」と池上さん。権藤さんからは「三鷹キャンパスにもぜひ英語サロンを」との要望も。2人の協力で大瀧新学長の明確なメッセージをお聞きすることができました。(有)

新たな時代に船出する杏林大学丸。この舵取り役を担うことになった大瀧新学長に、めざす大学像を聞きました。この中で大瀧学長は「『社会の健康』を守る大学をめざそう」と呼びかけています。今号でも、大学が掲げる「グローバル人材の育成や地域への貢献」を身をもって実践する女性たちを紹介しました。こつこつ地道に続けるこうした努力が「社会の健康」を守ることに繋がって行くのでしょうか。(島)

東京の桜が満開と発表された今日、三鷹キャンパスでは臨床実習を前にした医学部新5年生のための白衣式が行われました。来月は入学式。そのあとオープンキャンパス、夏休み、秋の卒業式・入学式、創立記念日、学園祭、冬休み、入試、就職活動、国家試験、卒業式…。季節とともに学生の成長を感じています。(酒)